天国からの二重奏

マヨラー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
天国からの二重奏

【Ｎコード】
Ｎ５３４８Ｌ

【作者名】
マヨラー

【あらすじ】
生きる意味……存在する意味…。
”意味”無くして、人は生きてはいけないのだろう。
存在する意味を探す男・音無と、生きる意味を見付けるアタシ・岩沢の物語……。

ＥＰＳＯＤＥ．００：＆ｑｕｏｔ；死んでたまるか戦線＆ｑｕｏｔ；（前書き）

・Ａｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓ！二次創作。
・原作ブレイカー注意。
・設定自体が原作と異なる。
・主人公は岩沢さん。
・話の省略が多い（話自体は原作沿いなので、原作と同じような部分は省略したりする。）
・原作見てないと分からないかもです。
・後書きまで読んでくれると嬉しいです。

…以上の注意点で大丈夫な人はお入り下さい（＾＾）

ＥＰＳＯＤＥ．００：＆ｑｕｏｔ；死んでたまるか戦線＆ｑｕｏｔ；

目を開けたら、知らない世界が飛び込んできた。

漆黒の空、灰色の雲、笑う満月。

何が起きたか理解できぬ頭に、これまた知らない少女の声が飛び込んできた。

「目が覚めた？」

首を回し、目覚めたばかりではっきりとしない眼で、声の主の姿を捉える。

「ここ……は？」

そう問い掛けたアタシに声の主――狙撃銃らしきモノを構えた、紫髪の少女が答えた。

「ようこそ、”死んでたまるか戦線”へ。」

『天国からの二重奏』
ＥＰＳＯＤＥ．００→
→”死んでたまるか戦線”

「ん……どこだ…ここ…？」

ふと、背後から聞こえてきたのは男の声。

「あら、こっちもお目覚め？」

アタシの背後にいる男に向かって、紫髪の少女がアタシの時と同じ

様に声をかける。

「ようこそ、”死んでたまるか戦線”へ。」

「…は？」

男が困惑の声を上げる。

…どうやら彼もアタシと同じく、状況が把握できていないらしい。

「…ねぇ、」

「…なぁ、」

同時に口を開いたアタシと男の声が重なった。
そしてこのタイミングで始めて彼と目が合う。

茶髪の少年…年は自分とあまり変わらない様に見える。

「……。」

「……。」

目が合ったままの二人の間に流れる沈黙。

その沈黙を破るように、紫髪の少女がその両手で持った狙撃銃をガチャッと鳴らす。

「唐突だけど、二人とも入隊してくれないかしら？」

『……入隊？』

「ここにいるって事は…あなた達、死んだのよ。」

『……。』

いきなり告げられた事実に、再び二人は目を合わせる。

紫髪の少女は相変わらず、私達がいる方向とは反対方向に銃口を向け、構わず話を続けた。

「ここは死んだ後の世界…。何もしなければ消されるわよ。」

流れる雲が満月を隠し、辺りが一層暗くなった。

「消されるって…」

「誰に？」

二人で一つの質問を投げ掛けた。

「そりゃあ神じゃない？」

『……。』

「ついでに言っておくと、入隊っていうのは”死んでたまるか戦線”に入隊して欲しいって意味よ。」

最早こちらの質問を待つこと無く、紫髪の少女は説明を始める。
この先何を質問されるのかも全て分かっているかの様な手際で、現在の状況について説明を始めた。

一つ、”死んでたまるか戦線”の呼称はまだ正式な名称では無いということ。

一つ、彼女の持っている銃は本物であること。

一つ、順応性を高め、あるがままを受け止めるのがこの世界でやっていくコツだという事。

そして一つ、”死んでたまるか戦線”は”天使”と呼ばれる少女と戦っているという事。

一通り説明を終えると、紫髪の少女が溜め息混じりに言う。

「やっぱ”死んでたまるか戦線”はとっとと変えたいわ……あなた達、考えておいて。」

信じられない事のオンパレードだった。

ここが死後の世界である事、そして…紫髪の少女が銃口を向けているのが、どう見ても普通の女の子だということ。

どうも彼女が”天使”と呼ばれる”死んでたまるか戦線”の敵らしい…。

謎だらけのこの世界で

目覚め

出逢い

分からない事だらけのこの状況で

動き

行動し

そして受け止めた。

いつしかアタシ……岩沢と、アタシと共に目覚めた男……音無は”死んでたまるか戦線”に入隊していた。

”ゆり”と呼ばれる女の子率いる”死んでたまるか戦線”との出逢い。

秩序と自然の摂理に逆らおうとする者達との出逢い。

そしてこれが、生きる意味を探す少年と、生きる意味を見付けるア

タシの物語の始まりだった……。

ＥＰＳＯＤＥ．００↓

↓ＮＥＸＴ：ＥＰＳＯＤＥ．０１

ＥＰＳＯＤＥ．００：＆ｑｕｏｔ；死んでたまるか戦線＆ｑｕｏｔ；（後書き）

始まりました「天国からの二重奏」。
ＥＰＳＯＤＥ．００…プロローグですので短めです。
次話から本格的にやっていきます、宜しくお願いします！

ＥＰＳＯＤＥ．０１：肉うどん、３００円。

生きていた頃の記憶が曖昧だった。

記憶は一応あるのだが、欠けている部分が所々あった。

自分が幼い頃から両親は喧嘩ばかりしていて…
居場所はあって無いようなモノだった。
自分の居場所はここでは無いと、幼心に思っていたのを覚えている。

それと死に際の事。

バイトをしていて、倒れて、入院して…それで…――。

何を目的にバイトをしていたのか、何故倒れたのか、そんなことは覚えていない。

忘れてしまっているくらいなのだから、大した記憶では無いのだろうと……

この時はまだ、そう思っていた。

『天国からの二重奏』
ＥＰＳＯＤＥ．０１→
→肉うどん、３００円。

「作戦名、オペレーション”トルネード”。」

”ゆり”、もしくは”ゆりっぺ”と呼ばれる紫髪の女が今回の作戦名を告げる。
同時に周囲の”死んでたまるか戦線”メンバーがざわついた。

”トルネード”という単語から大層大掛かりな事を想像したのは、アタシと同時期に戦線へ入隊した音無も同じだったようだ。

「まず、あなた達二人には慣れてもらう為に、いつもやっている簡単な作戦に参加して貰うわ。」

真っ暗な会議室に映し出された、巨大な作戦モニターの前の議長席に肘をついて腰掛けたゆりが言う。

続けて、アタシと音無が呟く。

「いつもやっている作戦…？」

「それがその”トルネード”…？」

「ええ。」

ゆりがニヤリと笑いながら、拳をギュッと握った。

「生徒から食券を巻き上げる！」

「そっちの”巻き上げる”かよ！」

驚く程キレのあるツッコミをかます音無に、思わずクスッと笑って

しまう。

まるで漫才を見ているかのようだ。

「なんだよソレ、イジメかよ！！？失望したぜ、武器や頭数だけ揃えやがってよ！！！」

「貴様ァ、それはゆりっぺに対する侮辱だ、撤回して貰おう。」

「なんでだよ！！」

野田、と呼ばれる紫髪の男が、その手に持った斧槍”ハルバート”を音無の喉元に向けながら、威圧的に言う。

「で、本当の所なんなの？そのオペレーション”トルネード”っていうのは。」

「本当の所も何も、さっき言った通りよ。生徒から食券を巻き上げるのよ、それも一般生徒には危害を加えずに、ね。」

そう言いながらパソコンをいじり始めるゆり。
彼女がマウスをダブルクリックすると、スクリーンに学校の一部施設が映し出された。

「いい？あなた達二人は”天使”の進行を阻止するバリケード班。作戦ポイントである食堂を取り囲む様にそれぞれ指定のポジションに武装待機。安心しなさい、楽な所に置いてあげる。細かい位置は、後で高松君と大山君に確認して。」

眼鏡男子の高松、これといった特徴がない大山がこちらに小さく手を振る。

どうやら詳しい事は分からないまま作戦が開始されそうだ。

やってみて覚えろ、という事だろうか。

「遊佐、”ガルデモ”メンバーに今日も期待してるわ、と伝えておいて。」

「了解しました。」

「天使が現れたら各自発砲。それが増援要請の合図になるわ。何処

かで銃声が聴こえたら、二人も駆けつけるように。」

音無と顔を見合わせ、再びゆりに視線を戻すと、二人同時に小さく頷いた。

「作戦開始時刻は”１８：３０（イチハチサンマル）”。オペレーション…スタートッ！！！」

――Ａｎｇｅｌ　ｂｅａｔｓ！――

ハァッ、と溜め息をつきながら、音無が支給された拳銃を眺めた。

「この作戦で一体どうやって食券を平和的に巻き上げるんだ…？」

「さあね。」

第二連絡橋と呼ばれる場所に、私達二人は待機していた。
ゆりによると、一本道なので比較的守りは楽な場所らしい。

「とゆうか、何で素人二人だけに一ヵ所を任せるんだよ？それぞれ経験者と組ませた方が確実に安全だと思うんだが……。」

「さあね。」

作戦開始時刻までの時間、何をするでもなく時間を潰す。

全くお互いを知らない男女二人、もっと気まずい雰囲気になると思ったが、彼…音無は、知らない人間だとか、そのような事はあまり気にしていないようだ。

私は彼の言葉に「さあね。」と返すだけだったが、それも彼は気にしていない様子。

元より、あまり話すのが得意な方ではないので、彼の性格は私的には有り難かった。

「なぁ、あんた…え～と……」

「岩沢でいいよ。」

「そうか。じゃあ岩沢、お前は…過去の記憶はあるのか？ここに来る前の。」

投げ掛けられた質問…。
彼、音無はここに来る前の記憶が無いらしい。
唯一思い出せたのは、自身の苗字”音無”だけだった。
ここに来る前の世界…つまり死前の世界での死因によっては、この世界に来た際に記憶を失っているケースも珍しく無いと言う。

「…あるよ。」

私は答える。
自分は記憶を失っていない。
この時はまだ、そう思っていた。

だからこの時私は、質問に対して「ある」と答えてしまった。

しかし……

「私は……」

自分の過去を語ろうとして、初めて気付く。

…記憶が、完全なモノでは無かったのだ。

バイトをしていて、急に倒れて、そして入院して……――。

「どうした、岩沢？」

「……欠けている。」

「…は？」

「記憶が、欠けている。」

入院した事は覚えている。

…しかし何故、何の為にバイトをしていたのか、何故、何が原因で倒れたのか、いつ、何時死んだのか……。

詳しいことを覚えていなかった。

「記憶が、完全じゃないって事か。」

「そうみたいだ。」

そう言葉を交わした後、音無は妙に納得したような顔をする。

「…何？」

「ん、あぁいや、合点がいったんだ。もしあんたが、自分が死んだ事を覚えていたとしたら、初めにゆりが”ここは死んだ後の世界”って言ったときに、あんたは納得していた筈だ。でもあんたは、俺と同じ反応をした。”信じられない”って。」

「…なるほど、ね。」

なるほど、と思わず納得させられる。

彼は、私本人よりも先に私の記憶が欠けている事に気付いていた訳だ。

「でもまぁ、俺よりはマシだろ？忘れてる事よりも覚えてる事の方が多いんだし、名前だってフルネームで覚えてるんだろ？」

「あぁ。私は…――。」

自分の名前を口に出そうと…彼に教えようとして、口を止める。

「……。」

「……？」

何か、具体的な事は分からなかったが、とにかく”嫌”だった。
自分の名前を口に出すのを、何故か自然に恐れた。
私の名前は……”岩沢　麻美”。

何故だか”麻美”という自分の名前が脳をよぎった瞬間、寒気がしたのだ。

「…なんでもない、今のは忘れてくれ……。」

「……？……そうか、まぁいいけどさ。」

彼は深くは追求しなかった。

私はここでもまた、彼の性格に感謝することになった。

―――Ａｎｇｅｌ　ｂｅａｔｓ！―――

１８：３０、作戦開始時刻になった。

雲が流れ、隠れていた月が姿を現し、周囲を、私を、音無を明るく照らし出す。

「時間か…。」

「そうみたいね。」

そんな一言の会話を挟んだ直後、食堂内から突然聞こえてくる歓声、演奏音。

作戦の一部である”ゲリラライヴ”が開始されたようだ。

「……岩沢？」

「……。」

私は、その演奏音を聴いて固まっていた。
遠くまで響くギターの音、観衆の手拍子。
そんなライヴの情景が、やけに私の頭に引っ掛かった。

「おい、岩沢？」

「ん？あぁ…悪い。」

「どうしたんだよいきなり？ボーッとしちゃってさ。」

「いや…よく分からない。」

一瞬、自分が路上でアコースティックギターを弾きながら歌を歌っている情景が、頭に浮かんだ。
なんだったのだろう、今のは…。

その疑問の答えに行き着く間もなく、音無の焦った声が夜の闇に響き渡った。

「来たぞ、岩沢！！」

咄嗟に音無の視線を追う。

連絡橋の向こう岸、そこに確かに見える”天使”の姿。

「現れた、現れやがった…俺達の所に…ッ！」

「今の戦線の弱点って事…？完全に見くびられてるようね…。」

二人同時に慌ててハンドガンを構える。

やらねば、やられる…。

いくら見た目が普通の少女であろうと、先程音無が彼女に刺された事に違いは無い。

「撃つぞ、岩沢！」

「ああ…ッ！」

掛け声と同時に、二発分の銃声が闇夜に響き渡った。

発砲の反動が自分に伝わり、自分が本当に銃を撃ったことを自覚する。

「あ、当たった…ッ！！」

音無の声が隣から聞こえる。

銃弾はそれぞれ、天使の腹部と左肩に着弾した。

天使の体に鮮血がみるみる広がっていく。

「…ッ！…足で良かったのに…。」

「もう十分じゃないか……ッ。」

私達が拳銃を構えた手を下ろすとほぼ同時に、天使が呟いた。

「ガードスキル”ハンドソニック”。」

その言葉の意味を理解するよりも早く、天使の右手…制服の裾から、刃物の様な形をした電子媒体が現れた。

腹部と左肩には血が滲んでいるというのに、まるでダメージが無いかの様に、天使はこちらに向かってゆっくり歩き出す。

「そんな…効いてない…！？」

「どうしてだ……ッ！！？」

再び天使に向かってハンドガンを構え、発砲する。

天使の右手の刃物”ハンドソニック”が易々と二発の銃弾を切り落

とし、その衝撃音と火花が散る。

その間にも、天使は確実に歩を進め、こちらとの距離を詰めてくる。

頬を伝う汗、拳銃を握った手にも汗。

心臓がドクドクと脈打つ。

「走れ、走るぞ！！！」

音無が私の腕を掴み、走り出した。

走りながら後方へ発砲を続けるが、天使は平然とした顔で全てを弾いてみせる。

「どうして、どうして止まらない！！」

「知るか、私に聞くな！！」

走り続け、息が上がる。

後退を続け、とうとう食堂前まで追いやられた。

「ハァ…ハァ……ッッ！！」

「くっ……ッ！！」

尚も迫る天使に、無駄だとは分かりながらも銃を向ける。

「くそっ……ッ！」

音無の口からそんな言葉が漏れた、その瞬間だった。

（ビュン……！！）

私達の横を何かが物凄い勢いで通り過ぎ、天使に向かって飛んでいった。

ガキィン、とそれを弾く天使。
”何か”が飛んできた方向を見ると、そこには斧槍の男…野田が立っていた。

「チィ、外したか。」

先程投げられた物はどうやら彼の斧槍だったらしい。
ようやく援軍が来たようだ。

「待たせたなァ！！」

「Ｇｅｔ　ｙｏｕ　ｗｉｌｌ　ｏｋ！」

「一番弱ェ所狙われたんじゃねぇかァ？」

「まだハンドソニックだけだよ……！」

「広い場所へ！！」

「後退しながら加重攻撃…ッ！！」

「了解。」

野田に続き、バリケード班の仲間達が次々に現れる。

「ガードスキル”ディストーション”。」

声と同時に、今度は天使の体全身が電子媒体に包まれる。

同時、戦線の中の一人が声を上げた。

「撃てェッッ！！！！！」

号令と同時に、何十何百もの銃弾が一斉に天使目掛けて放たれる。

凄まじい光景だった。

しかしそれらの銃弾は天使に当たること無く弾かれていく。

そんな激しい闘いを、私達二人はただ立ち尽くして見ているしか無かった。

「時間稼ぎが…まさかこんな壮絶な事になるなんて……。」

音無がそんな事を呟いたのも、私は聞いていなかった。

食堂の目の前まで後退した事で、先程よりも鮮明に聞こえてくる演奏音。

私はただただ立ち尽くし、その演奏に聞き惚れていた。

演奏が終焉を迎え、食堂内の盛り上がりがピークに達した頃、不意に上空から降り注ぐ”食券”。

その景色はさながら、金吹雪の様だった。

生徒から食券を巻き上げる作戦…。

何をどうやったのかは知らないが、なるほど、これがオペレーション”トルネード”というものらしい。

降ってきた食券の中の一枚を手に取る。

肉うどん、３００円。

間もなく演奏が終わり、私達の背後で天使と応戦していたバリケード班が引き上げてきた。

「それでいいのか？行くぞ！」

青髪の男、日向に促され、私と音無は小走りで食堂へと向かった。

振り返ると、独り取り残された天使の小さな姿。

金吹雪の中のその姿は、何処か哀しげに、寂しげに…儚げに見えた…。

その化細く清楚な、不思議な美しさをは、本当に天使のようだった……。

―――Ａｎｇｅｌ　ｂｅａｔｓ！―――

食堂内はガヤガヤと賑わっていた。

大勢の戦線メンバーや一般生徒…ＮＰＣ。

皆一様に楽しそうに話しながら、暖かい食事を口に運ぶ。

そんな中、私は一人考え事をしていた。

生きていた頃の記憶、先程頭に浮かんだ、あの情景…ギターを持った己の姿。

私は死前……何をしていた…？

「食わないのか？伸びちまうぞ。」

隣にいた音無が私に声をかける。

「いや…ちょっと考え事…。そういうアンタも、食わないの？」

「いや…うん、考え事だ。」

「真似するな。」

「はは。」

何気無い会話。

彼の笑い声を聞く頃には、もう考え事はどこかへいなくなっていた。

…そうだ、何も分からないこの世界で悩んでいたって仕方がない。

記憶が無いのは、彼も同じなのだから。

その彼は、しっかり前に進もうとしているじゃないか。

私も、躓いてなんかいられないな…。

「…心配してくれてありがとな……記憶無し男。（キオクナシオ）」

「なんだよそれ、記憶欠け女？（キオクカケコ）」

彼がおどけて笑った。

私もつられて笑う。

「はは、確かに嫌な呼び名だな、え～と……」

「音無でいいよ、岩沢。」

「ああ。じゃあ、音無。」

「ん？」

冷水の入ったコップを手に取り、初めて名を呼んだ彼に向けた。

「初任務おつかれ、ご苦労さん。」

優しい微笑みを返し、彼も私のコップに自らのコップを宛がう。

「そっちこそお疲れ様。」

二人一緒にコップ内の水を飲み干し、プハーっと息をつく。

「んじゃ、食うか。」

「ああ。」

彼に促され、少し伸びてしまった肉うどんを口に運んだ。

…死の世界に来て初めての食事。

少し伸びてしまったけれど、それでも美味しい、美味しい肉うどんだった。

ＥＰＳＯＤＥ．０１↓

↓ＮＥＸＴ：ＥＰＳＯＤＥ．０２

ＥＰＳＯＤＥ．０１：肉うどん、３００円。（後書き）

０話投稿から結構経ってしまいました事をお詫び申し上げます、マヨラーです。

実は高専のテストが忙しかったのですが、やっと暇が出来たので続きを執筆した所存で御座います。
この０１話から、少しずつ原作とは違った物語が動いていきます。
今回は始動と伏線張りの回。

岩沢と音無のこれからにご期待下さい。

あ、あと感想くれた方、有り難う御座いました！（一人でしたが）

並びにお気に入り登録してくれた方々、お気に入り作者登録してくれた方々も有り難う御座います！
執筆の遅い私ですが、精一杯やっていきますので、これからも宜しくお願いします！

ではまた次話で会いましょう！

ＥＰＳＯＤＥ．０２：何故、何故、何故……――。

昼下がりの平和な青空に、銃声がこだまする。

カラン、と銃弾を受けた空き缶が吹っ飛び、転がった。

「大分命中精度が上がってきたな。」

「ああ。今度はアタシの番だな。」

パァンと、また銃弾が響き、空き缶が跳ねる。

死後の世界…死んだ世界戦線に入隊してから、一日が経ち、二日目。

静かで平和な、そんな青空の下……――。

『天国からの二重奏』

ＥＰＳＯＤＥ．０２↓

↓何故、何故、何故……――。

「ふぅ～～…そろそろ休憩にするか。」

「そうね、弾も切れてきたし。」

第二連絡橋と呼ばれる学校内の橋の下…この前天使と対峙した、あの橋の下に、私達はいた。

何をしていたかといえば、銃の射撃練習である。

何故こんな事をしているかといえば、事の発端はゆりである。

《と、言うわけで今日の報告会議は終わりよ、各自解散！…あっ、そこの二人はちょっと残って。》

《なんだよ？》

《…いい？あなた達二人は同時期にこの世界にやって来た新人、つまり同期よ。当然、作戦では同期と組む事も多くなるわ。あなた達にとっても、全く知らない上司と組むよりも、同じ前も後ろも見えない状況の同期同士で組んだ方がやり易いでしょ？》

《いや、確かにあんたらは全く知らない上司かも知れないが、俺達だって全く知らない者同士だぞ、しかも男女だ。》

《…同意。》

《まぁまぁ細かい事はいいから、これから先の二人一組での作戦時はあなた達はペアということになるわ。今のうちに二人で射撃練習でもしときなさい？いざって時に役に立つのは己の力と仲間とのコンビネーションよ。》

《どうしてそうなった～～～～！！》

《……同意。》

という訳である。

「じゃあ飲み物買ってくるけど、何が飲みたいとか…そういうのあるか？」

「いいよ、アタシも行く。この世界の自販機じゃ何があるかも分からないしね。」

「ハハ、違いない。」

軽口を交わし、弾倉を空にした銃を太股に付けたガンホルダーに収める。

音無も銃を懐にしまったのを確認して、私達は第二連絡橋を後にした。

――Ａｎｇｅｌ　ｂｅａｔｓ！――

ガタン、といかにもそれらしい音を立てて、望みの飲料が自販機から吐き出された。

”ｋｅｙコーラ”。

そんな名前の炭酸飲料の冷たい缶を開け、渇いた喉を潤す為にそれを口へと運ぶ。

はっきり言って、コカ・コーラと大して変わらない代物だった。

渇いた喉の中を刺激的な甘い液体が伝っていくのを感じる。

そんな私の後ろでまた自販機が缶を吐き出す音が聞こえる。

私の横に歩いてきた音無が持っていたのは”ｋｅｙコーヒー”。

思わず笑ってしまった。

「喉が渇いてるのにコーヒーか？」

「笑うなよ、別にいいじゃないか、俺は炭酸は飲めないんだ。それ

にコーヒーだって飲んでみると意外とうまいモンだぜ？”練習後の渇いた喉と体にｋｅｙコーヒー”ってな？」

「ハハ、笑うなと言っておいて笑わそうとするな。」

戯言遊びがこんなに楽しいと感じたのは、人生で初めてかもしれない、と思った。
まぁ、人生が終わった後の世界な訳だが。

暑くも寒くも無い、そんな気持ちの良い陽気の中、飲み終えた空き缶を自販機横に設置されたゴミ箱に投げ込む。

ナイスシュート。
ジャストでゴミ箱に入ったコーラ缶とコーヒー缶が、カランと音を立てた。

「さて、これからどうするか…。」

「どうするも何も、練習を続けるんじゃないのか？」

「いや、そう言えば俺達さ、まだここの事よく知らないじゃん？施

設も人も、少しは把握しといた方が良いんじゃないか？」

立派にそびえ立つ校舎を見上げながら、音無が言った。

「だからこれからさ、校内探索でもしようかと思うんだよ。戦線のメンバーに挨拶しながら回ってみたりさ。」

「…あまり人と話すのは得意な方じゃないんだ。」

「まぁ無理にとは言わないよ、嫌なら俺だけで行くから。お前は練習しててくれていいよ。」

「おいおい、年頃の女の子を一人にする気か？」

「人と話すのは得意じゃないのに一人は嫌なんだな。」

単調な言葉のやりとりの中で、彼がそんな事を言った。

ごく自然に、その質問に辿り着いた。

「それは……」

続きの言葉を口に出そうとして、死前の世界での日常の光景が脳裏をかすめる。

《じゃあ何！？アタシが悪いって言うの！！？》

《お前以外の誰が悪いってんだよ！！》

《アンタでしょ！！毎日毎日酒ばっかり呑んだくれて！！》

…両親は、喧嘩ばかりしていた。
逃げ込む為の自分の部屋も無いような小さな家の、部屋の隅で…いつも一人で小さく丸くなるしか無かった。

一人で…独りで……――。

「……一人は、嫌だ。」

「…岩沢…？」

明らかに声のトーンが低くなった私を心配するように、音無が声をかけてくれる。

横に座っている音無の視線を感じて目を合わす。

心配をかけてはいけないと、心の中で思っていた。

しかし私の眼を捉えた、彼の優しい双眼に、全てを見透かされそうで……。

心の内の闇を悟られてしまいそうで……。

私は彼から、視線をそらした…。

ふと、そんな私の肩の上に手が乗せられる。

言うまでもなく、その手の温もりは音無のモノだった。

「じゃ、早く行こうぜ？」

そんなことを言って音無は、無邪気に笑ってみせる。

「俺も一人は嫌だ。」

先に立ち上がった彼に手を引かれて私も立ち上がる。

風が吹き抜け、彼の髪を、私の髪を揺らしていく。

自然と頬が緩んだ。

「しょうがないな、付いていってやるよ。」

「そうそう、そうこなくちゃな。」

歩き出した彼に続いて、私も歩き出す。

彼の後を追う。

「…ありがとう。」

小さく囁いた。

それが彼に聞こえていたのか、聞こえていなかったのかは、彼しか知り得ない事だった。

――Ａｎｇｅｌ　ｂｅａｔｓ！――

「しっかしこの戦線のメンバーはキャラが濃い奴らばっかりだな。」

「確かに。アンタが凄くまともな人間だと思えてくるよ。」

「おい、それって今までは俺の事をまともな人間だと思っていなか

ったって事か！？なぁおい、どうなんだよ！？」

「ハハハ、冗談だよ。」

そんな冗談を言い合いながら、校舎内を歩いていく。

そんな時だった…。

いつか聴いたあの演奏音が、どこからともなく聞こえてきたのは……。

そう、オペレーション・”トルネード”で天使と対峙していた時に聴いた、ゲリラライヴの演奏音だった。

「この音は…あ〜〜…なんだっけ？」

音無が隣で首を傾げる。

「Ｇｉｒｌｓ…Ｄｅａｄ　ｍｏｎｓｔｅｒ……。」

頭が空になった。

周りの景色が消えた。

一人の世界に入っていく。
吸い込まれていく。

真っ暗な空間に、一人立ち竦む私。

音楽と私だけの世界だった。

周りの音も、殆ど耳に入っていなかった。

「岩沢？」

「……。」

「おーい岩沢ぁ、聞いてるか～？」

「……。」

「…おい、ホントにどうした？」

肩に置かれた手。

一人の世界から現実に引き戻され、ここでようやく、音無に名前を

呼ばれている事に気付く。

「ん、あぁ…すまない。」

「どうしたんだよ？急に固まっちまってさ。」

「いや…よく分からない。ただ…」

ただ……――。

「多分私は…音楽が好きなんだ。」

「多分って…あぁそうか。お前、記憶が欠けてるんだったな…。だから”多分”か。」

「あぁ。きっと好きだったんだ…ここに来る前から。」

そうだ。

そうだった。
そうだったのだ。

自分の居場所も分からぬ辛い日々の中で、唯一私に救いを与えてくれたのが音楽だった。

辛いときは、悲しい時は、寂しい時は、耳をイヤホンで蓋して、音楽の世界に逃げ込んだ。

…私を、救い出してくれた。

そんな過去の記憶に思いを馳せていると、音無が言うのだった。

「じゃ、聞いていくか？」

「…えっ？」

「もしかしたら、お前の記憶に関係あるかもしれないしな。それに、俺も音楽は好きだ。」

彼が微笑む。
優しく。
手を引かれる。

「…あぁ。じゃあ、一緒に行こう。音無。」

「了解。」

歩き出した、二人分の脚。
私の狭い歩幅に、自然と彼が合わせてくれる。
二人並ぶその姿、男女特有の身長差。
…目的地は、音楽室。

―――Ａｎｇｅｌ　ｂｅａｔｓ！―――

シンバルとギターの余韻が廊下に響く。

音楽室前に辿り着いた時、丁度曲が終わったところだった。

音楽室の入口から中を覗いていると、演奏を終えたバンドメンバーがこちらに気付く。

茶髪のポニーテールをした女が柔らかい笑みを浮かべながら手招きをする。

ドアを開け、音無と共に音楽室の入り口をくぐった。

「お邪魔しま〜す。」

「お邪魔します。」

「そんなに堅くなんなくていいよ。あんた達、新人だろ？気軽に見

学していってよ。」

私達に声をかけてくれた茶髪の彼女の後ろで、他の二人のメンバーがこちらに小さく手を振る。

「あ、私知ってますよ〜〜お二人の名前！え〜っと……あれ、なんでしたっけ？」

「知っててもも覚えてなきゃ意味ないじゃん〜。あれだよ、え〜と……あ、そうだ、音無さんと岩沢さんだ！」

金髪のメンバーが薄紫髪のメンバーの代わりに私達の名前を答える。

「岩沢です。」

「音無です、よろしく。」

「私はひさ子、よろしく。こっちの薄紫髪は入江、金髪は関根だ。」

「よろしく！」

「よろしくです。」

挨拶を済ますと、ベース（バンド内で低音を担当する弦楽器）を持った金髪の女…関根が丁寧な言葉遣いで質問を被せてくる。

「あの、お二方は音楽に興味があるんですか？」

「興味があるっていうか……うん、そうだな。…音楽は好きだ。」

「同じく。」

キャー、と言いながら関根がドラムスティックを持った入江に抱き付く。

「キャー、二人とも音楽好きらしいですよ、入江ちゃん！」

「ちょっ…私も聞いてたって！それに新入りさん達がいるんだからあんまり抱き付かないでよ、変な勘違いされたらどうするの？」

「え～？私は入江ちゃんとならいいですよ～、勘違いされても（笑）」

「イヤ～～！！レズなんてイヤ～～！！百合なんてイヤ～～！！」

ハァッ、とひさ子が溜め息をつく。

「いつまでやってんのよ、あんた達。お客さんにドン引きされても知らないわよ？」

「あ～、さてはひさ子さん疎外感感じちゃいました～？私はひさ子さんとでも全然構わな…――」

ゴスッ、と鈍い音が鳴る。
いつの間にか関根の頭とひさ子の拳から煙が上がっていた。

痛いだなんだと騒ぎながら、関根が頭を押さえながら悶えている。

「すまないね、見苦しいモノ見せちゃって。」

「ホント、変なモノ見せちゃってゴメンね。」

「いや、俺達は別に構わないけどさ、大丈夫なのか？彼女。」

先程まで暴れ悶えていた関根が今では死んだ様に固まっている。

「んあぁ大丈夫大丈夫。あの変なのは放っておけば生き返るから。」

「そうだ、変なの見せちゃったお詫びに一曲演奏してあげましょうよ、ひさ子さん！」

入江がピキーンと指を立てて提案する。

ひさ子もそれに同意すると、うつ伏せに倒れている関根に声をかけ

る。

「ほら変態、演奏するぞ演奏。」

「さっきから”変なモノ”とか”変なの”とか”変態”とか……人を変人扱いしないでくださぃょ〜〜。」

「も〜、冗談に決まってるでしょ〜？関根ちゃんだって分かってる癖に〜〜。」

入江が差し出した手に掴まって、関根が体を起こす。

ひさ子の差し出したベースを受け取り、そのストラップを肩に回す関根。

ひさ子も同じく、自分のギターストラップを肩にかけた。

ドラムの前に座る入江、ドドン、と二回バスペダルを踏み鳴らし、各ドラムパーツの位置を確認…セッティングしていく…。

バンドメンバー三人が目でお互いの準備が整った事を確認し合う…。

高まる緊張感の中、ひさ子が口を開いた…。

「曲は……」

続いて入江と関根が同時に、口を開く。

『ｍｙ　ｓｏｕｌ，ｙｏｕｒ　ｂｅａｔｓ！』

目の前の世界が、音で覆い尽くされた。

激しく鋭いギターの音

曲全体を支える力強いベース

ドラムが刻む軽快でパワフルなビートが、お腹に響く。

目の前では、音楽の世界に生きる者達が楽器と一体となって汗を流している。

「…スゲェ……。」

「…ああ。」

口数少なく、曲に魅入る。

あっという間に曲は終焉を迎え、気付けば僅かに残る曲の余韻の中、私は立っていた。

「凄かった。」

音無が感嘆の声と共に拍手を贈る。

「ありがと。」

ひさ子が額に流れる汗を制服の裾で拭き取った。

「ちょーっと走っちゃったかな？」（曲が走る＝曲が急ぎ足になってしまう事）

「うーん、良いんじゃないですか？このくらいのテンポの方がノリやすいですし。」

「お客さんいるんだからそういうのは後々。さ、ちょっと休憩しようか？」

――Ａｎｇｅｌ　ｂｅａｔｓ！――

「見ての通り、アタシ達のバンドにはヴォーカルがいないんだ。募集はかけてるんだけど…なかなか見付からなくてね。」

「お二人はどうです？歌に自信あったりとか楽器できたりとかしませんか？」

きっかけは、こんな何でもない様な雑談だった。

「いや、俺達、死前の記憶が無くてさ…分からないっていうかさ。」

「そうなんですか……。じゃあ、コレちょっと弾いてみます？意外とすんなりイケちゃうかも知れませんよ？”そういえば俺、死前ベースやってたんだったわ～。”っていう感じで（笑）」

訳の分からない事を言いながら、関根が音無にベースを手渡す。

「そうだね～、音楽が好きって事は、もしかしたら死前に音楽をやってたかも知れないしね。」

「アンタも持ってみるか？」

ひさ子が私に、自分のギターを差し出す。

「ありがとう。」

私は何も考えずに、差し出されたそのギターを受け取った。

手に、持った。

腕に、肩に

伝わるギターの重み、感覚。

…その時だった。

……私の頭の中で、何かが弾けた。

「……ッッ！！！」

息を呑む。

頭に勢いよく流れ込んでくる死前の記憶、記憶、記憶、記憶、記憶。

――…私はあの日、あの時、雨の中…

あのギターに出逢ったのだった――…。

――――Ａｎｇｅｌ　ｂｅａｔｓ！――――

雨が、降っていた。

しとしと、しとしと

雨が、降っていた。

そんな雨の日の帰り道、ゴミ置き場で出逢ったギター。

私は、歌い始めた。

自分の部屋も無いような小さな家の中で、両親は毎日の様に喧嘩していた。

そんな毎日の中で、私を救ってくれたのが音楽だった。

何も無かった私に、生きる勇気を与えてくれた。

生きる意味を…与えてくれた。

音楽の世界で生きていく決意をした矢先、突然私は倒れた。

世界が闇に覆われた。

生き甲斐も、何もかも失った何もない世界で私は絶望した。

せっかく手に入れた希望だったのに、掴むチャンスすら与えて貰えなかった。

何故、何故、何故と

悔やみ切れない哀しみと、理不尽なこの世界の全てを呪った。

”夢は叶わない”

”何も望むな”

”お前は独りだ”

”独りである定めなのだ”

世界がそう告げた。

何故、何故、何故……――。

何故私は存在する？

何故、何故、何故……――。

何故私ばかりがここまで不幸なのだ？

何故、何故、何故……――。

何故……。

――Ａｎｇｅｌ　ｂｅａｔｓ！――

「うぁぁぁぁぁっッッッ！！！！！！！」

「おい、いきなりどうした！！？」

気付けば頭を押さえて、叫んでいた。

頭が痛い。

世界が遠い。

「はぁッ……はぁッ……ッッ！」

「まずい、すぐに保健室に……――」

息を乱し、今にも倒れそうな私を見たひさ子が言う。

「ッいいから……ッ…少し一人にして……。」

「何言ってんだ、今にも倒れそうじゃないか！何があった！？」

音無が私の肩を掴んだ。

私の頬から流れ落ちた汗が喉元を伝い、胸元に流れていく。

「思い出した……。」

「……は？」

「全部、思い出したんだ……ッ。」

「だからそれがどうした……――。」

尚も食い下がる音無を、ひさ子が制する。

「…やめな…。今は、一人にしてやりな…。」

「なんで…ッ！」

「ギターは返して貰うよ。」

「……。」

何も言わない…沈黙を続ける私から、ひさ子がギターを取り上げる。

歯を食い縛った。

…何も言えず、その場から逃げるように踵を返す。

音楽室のドアを開け、駆け足で自分の部屋へと向かった。

「岩沢……ッ！！」

後ろで音無が私の名前を呼ぶのが聞こえたが、振り向かなかった。

そのまま私は階段を下り、完全に音楽室は見えなくなった。

「この世界において記憶とは……耐え難い辛い過去の事なんだ。」

「……？」

私のいなくなった音楽室で、ひさ子が音無にそれだけを告げた。

ＥＰＳＯＤＥ．０２↓

↓ＮＥＸＴ：ＥＰＳＯＤＥ．０３

ＥＰＳＯＤＥ．０２：何故、何故、何故……――。（後書き）

のろのろやってきました二話目、いかがでしたか？

レポートに追われながら仕上がったこの二話目、自分的には文字数も良い感じ？

原作で使われたセリフや場面を練り込みながら創ったオリジナルシナリオでした。

すこし、分かりにくい描写も多かったかと思います。

因みに現時点で音無と岩沢は「この世界にいる人間は、生きていた頃の未練やトラウマを抱えている人間だけである。」という事実を知りません。

ガルデモメンバーの設定的には一応…

ひさ子…ギター担当。お姉さん的。リーダー気質。頼りになる。

入江…ドラム担当。言葉遣いが現代っ娘。関根によく抱き付かれる。

関根…ベース担当。言葉遣いが丁寧。レズ疑惑。入江によく抱き付く。

って感じです。

伏線張り張りしながら話を進めていきたいと思います。

では、次話でまた会いましょう！

ＥＰＳＯＤＥ．０３：強さと資格

「そう……彼女、記憶を取り戻したのね…」

校長用の席に座ったゆりが呟いた。

証明が落ちた部屋で、モニターの放つ淡い光だけが部屋を、音無を、ゆりを、戦線メンバーを照らしていた。

戦線メンバーバリケード班は全校放送により、校長室に招集されていた。

「岩沢…どうしたってんだよ…？全員招集なのに来ないし…。」

「いや、今はいいわ…それより、そろそろ頃合いかしらね…。」

ゆりが頭に乗せたベレー帽をゆっくりと下ろした。

「話すのか、ゆりっぺ。」

「ええ……音無君、これから大切な事を話すから、耳穴全開にしてよく聞いてね。」

青髪の日向と目配せしたゆりが再び音無の方を見る。

「…この世界にいる人間は皆…死前の世界に未練を残して死んできた者達だけなのよ……。」

『天国からの二重奏』
ＥＰＳＯＤＥ．０３→
→強さと資格

「未練、トラウマ、やるせない現実への怒り、憤り……それがこの世界であり、私達なのよ。あなたも含めてね。」

「じゃあ、岩沢は…。」

「…今頃、闘ってるんじゃないかしら…。受け入れ難い現実とね…。」

一通りの説明を終えたゆりが、再びベレー帽を頭に乗せる。

「彼女の事は心配だけど、一旦この話は終わりよ。今は目の前の作戦に集中してちょうだい。」

「……っ。」

ゆりが手で合図すると、眼鏡長身男子、高松が現在戦線に起きている問題点を説明し始める。

この前の作戦…オペレーション”トルネード”を境に、武器や銃弾などの物資が不足し始めたのだという。

学校の地下には”ギルド”と呼ばれる施設があり、そこで戦線に必要な物資を生産している事、今回の作戦はその”ギルド”に物資の

調達に行くことが目的であるという説明をゆりから受ける。

「今回の作戦は…岩沢さん抜きでやるわ。」

「ちょっと…待ってくれ。」

静かな声で音無が言う。

「…なにかしら？」

口ではそのように返したゆりだったが、その眼はさも”音無が何を言いたいのか分かっている”かのような眼だった。

ゆりのそんな眼と音無の視線が重なり、音無は一瞬口をつぐんでしまうが、次の瞬間には口を開き、ゆっくりと自分の言いたい事を言葉にする。

「今回の作戦…俺も抜いてくれないか…？」

「…そんな事だろうとは思っていたわ。」

ふぅ、とゆりが息を吐く。

「気持ちは分かるわ、音無君。でもね…」

「……。」

「弱い人間に…この世界で生き残る資格はないわ……。」

「なっ……ッ！！？」

ゆりの発言に驚き、怒こったように声を上げる音無。
しかしそれを制したのは、日向だった。

「まぁ待て、話を最後まで聞けって。ゆりっぺは仲間を見捨てるような事はしねぇよ。」

日向の発言に照れたのか、少し頬を紅くしたゆりが、咳払いを一つする。

「ゴホン…聞いてくれるかしら、音無君？」

「あぁ、悪かった。続けてくれ。」

フッ、と音無に笑みを向けると、息を大きく吸って、また口を開く。言葉を、紡ぐ。

「……彼女は、独りで闘っているわ。自分の現実とね。…誰に相談するでも、打ち明けるでも無く、独りで全てを抱え込んで闘っている。それは多分、自分の問題なのだから自分で解決したいと思っての事だと思う。でもね、音無君…」

独りで闘っている、と聞いて音無の頭に岩沢の姿が浮かぶ。

彼女は今、どこにいるのだろうか…。
独りきりで、何を思っているのだろうか。

以前に独りは嫌だと言った彼女。

でも本当は、彼女はこの世界に来てからもずっと…独りぼっちだったのかもしれない。

誰かと一緒にいるときも、自分と一緒にいるときも、どこか彼女は遠くを見ている気がした。

勿論、ずっとそうであったとか、ずっと独りぼっちだったという訳では無いし、彼女が意識的に、仲間達を避けていたという訳では無い。

くだらないジョークで笑いあったり、共に作戦を成功させた時には喜びを分かち合ったり…そういう時の彼女は正しく彼女本人であっは筈だし、彼女の本質でもあった。

ただ単に彼女は、己でも気付く事無く、周囲の人間と一歩距離を開けていたのだと思う。

なんというか、彼女は人と付き合う事に慣れていない様に感じられた。

本気で人の心と触れ合った事がない様な…。

心許せる人、心休まる場所を全く持たずに、独りで人生を送ってきたかの様な…。

人との間の距離を詰めるという事自体を、その術自体を知らないかの様な…。

そんな寂しさが、確かに彼女からは感じ取れた。

もしかしたら、それは彼女の過去…生きていた時代の経験や記憶に起因しているのかも知れない。

独りは嫌だと言った彼女。

彼女は死前もずっとずっと、独りぼっちだったのでは無いだろうか…。

「でもね、音無君…。人に助けを求める強さを持ち合わせない人間に、助かる資格は無いのよ…。この世界において”弱い”とは…人を頼る事を知らない事なの。…だってそうでしょ？此処にいる大抵の人間は、生きていた時代に一人ではどうにもならない悩みを抱えていたからこそ”此処にいる”んじゃない。だったら、生きていた時には持ち合わせて無かった強さ…絆と信頼を得なければ、この世界では生き残れないわ…。人は変わらないといけないのよ。」

「絆と信頼…。」

「そうよ。彼女はまだ、あなたに助けを求めてはいない筈よ。」

「…俺に？」

「そう、誰でもない、あなたによ。…だから、あなたはまだ彼女を助けてはいけない。でも、もし彼女が…”人に頼る強さ”を見付けて、あなたに手を伸ばす事があったなら、その時は絶対にその手を掴むのよ。岩沢さんの手を掴んで、離さず、引っ張ってあげるの。…それが出来るかどうか、それはあなたの強さ次第よ。」

「俺の…強さ。」

音無が、自分の開いた手を眺め、握る。

「ま、あんまし深い意味はねぇよ。お前が岩沢と同期だから…ぐらいの理由だ。あんまり気負うなよ？」

日向が、音無の肩に手を乗せる。

「あぁ、有り難うな。え～と…」

「日向だ。そのまんま、日向って呼んでくれて構わない。」

「そうか、有り難うな。日向。」

「いいって事よ、気にすんな。」

ニカッと親しみのある笑いを音無に向ける日向。

ゆりが手を叩き、その場を締める。

「はい、この話はもう終わりよ。今から作戦場所まで移動するわ、付いてきてね。」

校長室の証明が付き、作戦の打合せが終わる。

目的地は、ギルド。

一人を欠いた戦線メンバーは、次の作戦へと動き出した…。

――――Ａｎｇｅｌ　ｂｅａｔｓ！――――

哀しい程に晴れ渡った青空が、私の曇った心とは対照的に笑っていた。

どこまでも、どこまでも広がる空。

そんな空から隠れる様に、私は第一連絡橋の下にいた。

大分落ち着いた胸の鼓動。

一人、橋の下で溜め息をつく。

思い出した、死前の記憶。

その記憶は受け入れるにはあまりにも虚しく、辛かった。

全てが、辛くなった。

自分が望んだ物は、全て自分が掴む前に砕け散ってしまうのではないかと思うと、何を望むのも怖かった。

「いつまで……ッ。」

いつまでこんな所で縮こまっているのだ、私は。

戦線の招集も無視して、何をやっているんだ、私は。

…自分の弱さに、嫌気がさす。

「……ッ。」

何も考えずに、大腿のガンホルダーに納めた銃を手に取り、射撃練習用に置かれた空き缶に向けて発砲する。

パァン、と銃弾が放たれる音が5回…。
しかし、空き缶は全く動かなかった。

「ハァッ……。」

当たらなかった。
心のブレが、手に伝わってしまったかのように、銃弾は僅かに目標をそれて、全て橋の足へと着弾した。

足を止めると、心がモヤモヤして、どうにかなってしまいそうだった。
こういう時は動いていた方がいいのだ。
他の事に集中して、嫌な曇りを心から追い出そうと、無意識に考えた。
そんな時に、ふと鳴る校内アナウンス。
《……――戦線メンバーバリケード班は全員直ちに体育館へ集まるこ

と。繰り返す、戦線メンバーバリケード班は…――≫

…行こう。

いつまでも、皆に迷惑をかける訳にはいかない。

自分の問題だ。
自分で…どうにかしないと。

そう心で呟き、体育館に向けて歩きだした。

――Ａｎｇｅｌ　ｂｅａｔｓ！――

「岩沢……ッ！？」

突如、体育館に現れた私の姿に戦線メンバーが驚きの声を上げる。

「ごめん、少し遅れた…。」

ざわつく一同。
その中で、音無とゆりだけは真っ直ぐにこちらを見据えていた。

「調子は大丈夫なのかしら、岩沢さん？」

「あぁ…心配をかけてすまなかった。もう大丈夫よ…。」

ゆりと日向が目を合わせ、頷く。

「いいわ、岩沢さんも今回の作戦に参加してもらうわ。異論は無いわね？じゃ、行くわよ。」

ゆりの号令と共に戦線メンバーが地下へと潜っていく。
あっという間に皆が地上から姿を消し、体育館にはゆり、日向、音無、そして私が残っていた。

「岩沢さん…闘っているのは、あなた一人じゃ無いわよ。」

「…えっ？」

まるで私の心を見透かしたような発言を残して、ゆりも地下へと潜っていった。

「あんまり気負うなよ？じゃ、俺も先に行くぞ。」

日向もゆりに続き、体育館は二人きりになった。
お互い目を合わせたまま、沈黙が走る。
耐えきれなくなり目をそらした私を見て、音無が呟く。

「言いたくなった時に言ってくれればいい。待ってるからな…岩沢。」

「……。」

返事は、しなかった、できなかった。

音無が私から地下入り口へと視線を移し、口を開く。

「行こう。」

「あぁ。」

高い声と低い声。

一組の男女の声が、体育館にこだまする。

それからお互いの目を一度も合わせる事無く、私達は地下へと降りていった。

地下の空気は、ひんやりと冷たかった。

――Ａｎｇｅｌ　ｂｅａｔｓ！――

「音無と岩沢、とか言ったか…。俺はお前らをまだ認めていない！」

「さっきからいないと思ったら…こんな所にいたのか、この馬鹿は。」

ギルドに入って直ぐの場所で待ち構えていたのは、斧槍を持った男。戦線メンバーからは『馬鹿』、もしくは『バカ』、もしくは『ばか』、もしくは『Ｂａｋａ』と呼ばれる男…たまに野田とも呼ばれるらしい。

「わざわざこんな所で待ち構えている意味が分かんないよなぁ。」

「野田君はシュチュエーションを重要視するみたいだよ…。」

「意味不明ね…。」

メンバーから呆れた様な声が次々と上がるが、野田は気にする事なく音無と私、交互に斧槍の切っ先を向ける。

「別に認められたくも無い。」

「アタシ達が何かした？あまりしつこいと、仲間に嫌われるよ。」

二人からの言葉にカチンと来たのか、野田は斧槍をグッと握り締め、こちらに歩み寄ってきた。

「貴様ら…この間は女だからという理由で片方は見逃してやったが

……次は仲良く１０００回死なせて……――。」

死なせてやろうか…そう野田が言いかけた時だった。

突如、何も無い筈の場所からハンマーが現れ、勢いよく馬鹿…ではなく野田を吹き飛ばしていった。

「グバはァァァァっっっ！！！！！？」

目の前のバカ…ではなく野田の体が浮き上がり、ハンマー諸ともギルドの土壁へと叩き付けられた。

ドガァァァ、という音と共に崩れた土砂がばか…ではなくＢａｋａの姿をあっという間に隠していった。

「臨戦体制ッ！！」

「トラップが解除されてねぇのか！？」

戦線メンバーが馬鹿野田には目もくれずに戦闘体制を取る。

対天使用トラップ…。

ギルドという施設は戦線の物資生産を担当する施設であり、戦線で最も重要な役割を果たす組織だという。

仮にギルドが敵…天使の手に墜ち壊滅などという事になれば、戦線は武器の補充が出来なくなり、たちまち戦闘不能に陥ってしまうらしい。

その重要な施設、ギルドを天使から守る為に作られたのが”対天使用トラップ”だという。

このギルドへと続く地下通路内には、先程野田が吹き飛ばされたトラップの様な物が何重にも敷かれているらしい。

普段、ゆりが事前にギルドに対して「物資調達」に向かう旨を話しておいた場合、トラップは解除されているらしい…。

そのトラップが解除されていない、ということが意味するのは即ち…。

「天使が現れたのよ。」

ゆりの口から発せられた言葉に、メンバー一同がざわつきを見せる。

「天使を追うか？」

「トラップが解除されてねぇ中をかよ！？」

最後尾で銃を構える日向と、最前線で刀を構える藤巻が掛け合う。

目の前には、慣性の法則により忙しなく動く巨大な鉄鎚…ハンマーがギィッ…ギィッ…と音を奏でていた。

「天使はそのトラップでどうにかなるだろ、戻ろうぜ？」

「でもあれ程の戦闘能力を持った天使がそう簡単にどうにかなるものなの？」

「トラップはあくまで一時的な足止めに過ぎないわ…追うわよ。」

音無と私が掛け合い、ゆりが指令を出す。

薄暗いギルドの中に、ゆりの声が反響した。

「進軍よ！」

ＥＰＳＯＤＥ．０３↓

↓ＮＥＸＴ：ＥＰＳＯＤＥ．０４

ＥＰＳＯＤＥ．０３：強さと資格（後書き）

くそぅ、忙しい…。
そして小説賞用のアイデアがわき出てきてしまった（「□」；）！！
まとめたいッッ！

ということで、更新は亀以下ですがどうぞよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5348l/

天国からの二重奏

2010年12月13日03時20分発行